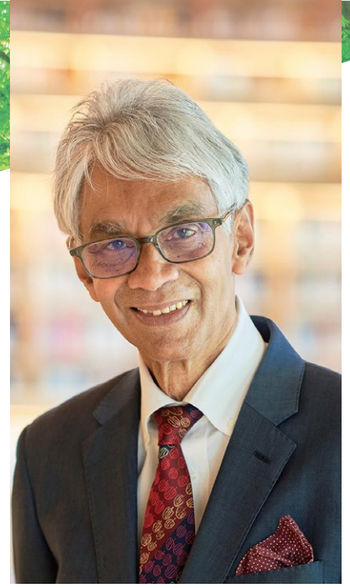
10

AKITA Biz Forest

あきたBizフォレスト TOPインタビュー

TOP INTERVIEW



公立大学法人 国際教養大学
理事長・学長　モンテ・カセム 氏

1947年スリランカ民主社会主義共和国コロンボ生まれ。
スリランカ大学自然科学部建築学科卒業後、日本へ留学し東京大学大学院工学系研究科博士課程で都市工学を専攻。国際連合地域開発センター（UNCRD）主任研究員・国連専門員等を経て、1994年に立命館大学国際関係学部教授。2004年に立命館アジア太平洋大学学長、学校法人立命館副総長、2018年大学院大学至善館学長等を経て、2021年6月より公立大学法人国際教養大学理事長・学長に就任。

あきたBIZフォレストTOPインタビューは、秋田の起業家と企業環境を応援することを宣言いただいた100名以上の経営者の皆様を中心に、起業家に役立つ話題と起業家へのメッセージを対談形式でまとめたものです。

デザイン・テクノロジー・データサイエンス分野に注目

工藤　本日はよろしくおねがいいたします。早速ですがカセム学長の出身やご経歴を簡単にお聞かせ下さい。

カセム　スリランカのコロンボ出身で、25歳まではスリランカのシナモン畑が広がる自然豊かな場所で過ごしました。スリランカで建築関係の仕事をはじめましたが、当時、親の勧めもあり、いくつかの国へ奨学金を応募したところ、日本で奨学金がもらえることになったのをきっかけに来日しました。正直なところ当時は日本のことをあまり知らなかったので、まさか日本で51年過ごすことになるとは思ってもいませんでした。

工藤　運命の巡り合わせなのかもしれませんね。カセム学長の日本での51年について少し詳しくお聞きかせ下さい。

カセム　大阪外語大学で日本語の勉強を行い、東京大学に通いながら日本地域開発センターというところに勤めました。大学院卒業後はゼネコンに就職し、主に都市開発の分野に携わりました。その後は国連に10年勤めました。国連地域開発センター（UNCRD）で働くうちに、環境と都市・地域開発との両立や調和を考えたいと思うようになりました。その後は勤務先を立命館大学に移し、フィールドサイエンスをベースに自然に関する荒れた生態系の復元や気候変動のデータ計測・観測機器を開発したり、そのデータを分析しました。環境保護や自然復元などの大切さを再認識しました。調査研究が好きでしたし現場での仕事も多かったので、特にこの頃の毎日は一番肌に合っていたというか、とにかく楽しかったですね。色々と結果も成果も出すこともできました。しかし立命館アジア太平洋大学が設立され、2代目の学長になってほしいと打診されました。学長になるとフィールドサイエンスができなくなることが想像できたので、正直に言えば本当は受けたくなかったです。でも後ろ髪をひかれながらも立命館アジア太平洋大学の学長になりました。その後2014年から秋田に来てここ国際教養大学で理事を務め、その後2021年に学長になりました。

工藤　自然の中で育ち、建築や工学などの人工物をつくる仕事に携わりながら、また自然をテーマにする場所に還ってくる。何だか考えさせられますね。話は変わりますが、カセム学長から見た、秋田の経済社会はどのように映っていますでしょうか?

カセム　まずはビジネスそのものが地域や環境があって成立しているという側面がありますので、決して口で言うほど簡単なことではないかもしれませんが、持続可能なビジネス環境づくりのためにも、ビジネスで得られた利益の一部を、中長期的に自然環境保護などにもっと還元できる社会になれば良いと思っています。また私が最初に秋田に来た頃、おそらく45年ほど前は砂利道も多かった印象でしたが、その頃に比べると確実に地域は豊かになっています。そもそも、富、タレント、技術力はどうしても大都市圏に集中する傾向があり、日本の現状をみても、地方都市は三大都市圏から、豊かさを分けあたえてもらう形になっています。一方で財政、環境、高齢化、過疎など、数多くの社会課題を考えると、今後も三大都市から地方へ豊かさを分け与える図式が持続できるとは非常に考えにくいと感じます。ですから地方圏が地方でお金を稼ぐ形にならないといけません。それをどのように推進して、どのように実現していくか? それこそが秋田或いは日本の地方都市が抱える、最も大きな課題だと考察しています。

工藤　なるほど、実に興味深いお話ですね。課題解決のイメージなどはお持ちですか?

カセム　既に現在、本学と秋田県とでその課題解決の推進を考えはじめていますが、細分化するとおおよそ8つの課題に分けられると考えています。中でもやはり課題解決ができる人材の育成は非常に重要だと感じています。そこに力を入れることで、課題解決の推進につながることはもちろんですが、同時に秋田県でパートナーとなる企業、スタートアップなども増やしていけると考えています。またその取り組みの中で、新興国との連携やパートナーシップを組み込むことが、より良い成果を生み出すために極めて重要なことだと思っていますし、またそれを実現するためには、外国人比率の高い本学の役割もまた重要だと考えています。新興国の大学と連携したサイバー研究チームなどをつくり、現在の日本の課題と新興国の未来の課題を一緒に研究する取り組みを推進したいと思っています。

工藤　面白いですね。そのステージが東京でも他県でもなく秋田という点がまたワクワクしますね。確かに秋田のスタートアップが増える要因や可能性を感じますが、カセム学長がスタートアップとして注目する分野はございますか?

カセム　私は今後ビジネス社会の中で新しい価値を生み出すものは、デザインとテクノロジーとデータサイエンスだと思っています。注目される秋田の再生可能エネルギーも、デザイン思考の落とし込みがとても重要だと思っています。特にエネルギーとモビリティは調和性が強いので、そこに大きな可能性を感じます。またデータサイエンスは今まで以上に重要度が高くなると思います。最もデータに厳しい要求があるのはヘルスケア部門です。その厳しい要求の中で得られるデータなので、例えば航空や宇宙などの専門性の高い分野でも簡単に応用できてしまいますので、とても高い価値があります。個人的にはヘルスケアのデータサイエンスができる人材、或いはその先にあるより高度なプログラムを創造できる人材を、この秋田で育成できればと思っています。そういった優れた人材育成の取り組みが進めば、おのずと若い世代や学生のスタートアップが増えるだけでなく、そういったスタートアップと組みたいというニーズで秋田が関わりを求められる地になる。という状況が理想的です。

工藤　私も国際教養大学の在校生や卒業生とのつながりがそこそこありますが、刺激を受けることが多いです。大学の存在そのものが地域の大きな資産ですね。

背景に想いを馳せながら世界各地の音楽を聴く。

最後に、カセム学長のご趣味を教えていただきました。
趣味の一つに音楽鑑賞。西洋クラシックなどを聞くことが多いですが、ブルースやサンバなど世界各地の民謡や土地の音楽を、そこで生活する人々の背景に想いを馳せながら聴くことが、とても奥深く楽しいとのこと。沖縄民謡や秋田民謡のことも語ってくれました。さすが日本在住歴51年。ある意味で日本人以上に日本人なモンテ・カセム学長でした。

本日は貴重なお時間とお話しを本当に有難う御財（ございま）増した。

インタビュー
合同会社ジェグルス（共同事業体ジェイワン）アントレプレナーコンシェルジュ　工藤　実

ライター　秋田大学　小林恵大
企　画　共同事業体ジェイワン（秋田市ビジネススタートアップ支援事業）